

PICK UP MOVIE

『Here』

[2023年/ベルギー/オランダ語・フランス語・ルーマニア語・中国語/83分] G
監督・脚本：パス・ドゥヴォス

第73回ベルリン国際映画祭エンカウンターズ部門最優秀作品賞&
国際映画批評家連盟賞(FIPRESCI賞)ダブル受賞

©Quetzalcoatl

異境で 生きるということ

5/24~



ベルギーのブリュッセル。ビルの建築現場で働く人たちがいる。仕事帰りに互いに交わす言葉は「よい休暇を」だ。どうやら夏のバカンスが始まるらしい。いろんな国から来て一緒に働いている人々が、夏の初めにそれぞれの国に帰っていく。ヨーロッパの都市では、こんな風景がすでに長年にわたって日常になっている。

シュテファンは、4週間の休暇を故郷のルーマニアで過ごすつもりだ。だから冷蔵庫を空にするために残り野菜でスープを作る。それを挨拶がてら友人に届けると皆が美味しいと喜んでくれる。帰郷を前にいろんな思いが頭を巡る。一見この地に馴染んでいるようなシュテファンだが、心の内はどうなのだろう。いま住んでいるブリュッセルにも、親たちが暮らすルーマニアにも、違和感があれば親しみもある。では果して自分はどこで生きていけばいいのか。いまの時代、多くの人が密かに抱え込んでいるであろうこの繊細なテーマを、この作品は静かなタッチで追っていく。

旅の支度をしながらシュテファンが挨拶に訪れるのは同郷人たちだ。もとは出稼ぎ者だった彼らは、シュテファンのスープに舌鼓を打ちながら談笑する。そんなとき彼らの心に去来するのは子ども時代の思い出だろう。シュテファンは心の奥の思いを漏らし始める。「休暇が終わってもここには戻らないかもしれない」と。この言葉に誰もが黙ってかすかに頷くのは、できれば自分もそうしたいとの心情からではないだろうか。

旅立ちを目前にして、シュテファンはやはり遠い異国からこの地に来たある人に偶然出会う。それは中国人女性シュシュだ。彼女は苔の研究者で大学で教えている。いわば移民のなかの成功者だが、彼女も異境に住む人ならではのそこはかとない不安を抱えている。だが一方で彼女は苔の生命力に強く惹かれ、その研究を進めてこの地に根付こうとしている。足元に無数にあるのに人の目を引くことの無い苔。その存在に気づかされ、そこから思わぬ力をもらう。この逸話は現代を生きる私たちに多くの示唆を与えてくれる。

果してシュテファンは、その後をどう生きていくのか。作品の枠を超えて登場人物の人生に思いを馳せずにはいられない、深く豊かな意味を秘めた作品だ。

プロフィール

田村志津枝

：ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスピンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオジエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。